

2022年3月6日(日)

老球の細道659号

### スポーツマネジメントの困難な時代

会津バスケットボール協会 室井 富仁

先月から危惧されていたロシアのウクライナ侵攻が現実となってしまった。毎日のように報道されるウクライナの戦場はなんとも言いようのない悲惨さを世界中に示している。理不尽な侵攻とそれに対して何ら対抗できない国際社会の無力さを思い知らされている。

150年前のわが会津における薩長を中心とする官軍の会津侵攻も同じようなものだったのだろうか。ウクライナの人と同じように戦える者は武器を取り勇敢に戦った。そして何の罪もない多くの人たちが命を落とした。いつの時代も戦争を始める人は安全な場所にステイホーム、戦場で命を落とす人々は何も知らずにゴー・ツー・トラベル。歴史は繰り返す。

コロナ禍の厳しい状況にさらに輪をかけたウクライナ危機の中で北京パラリンピックが開催された。大会開催中は休戦するという五輪、パラ憲章の違反で、プーチンと蜜月が噂されていたIOCバツハ会長の面目は潰された。切れ者のバツハ会長は切れてしまい、2月28日、ロシアの国際大会への参加を認めないよう各競技団体に働きかけた。後世の歴史家はこのことを「バツハの屈辱」と名付けるのだろうか。

そんな中で、北京パラ開催を直前に控えた国際パラリンピック委員会(IPC)はロシアとベラルーシの選手を「中立」の立場の個人資格で出場することを認めていたが、急遽開幕前日に両国選手の参加を認めないことを決定した。ロシア、ベラルーシ選手との対戦を拒否する姿勢を見せる国があらわれたり、選手村の雰囲気が悪化になり、冬季五輪の運営に支障をきたすことが心配される状況になったからであるとIPCの会長は話す。

このような動きは北京五輪のみならず、IOCの意向を受けた各国際競技連盟(IF)も同様である。国際サッカー連盟はロシアの代表やクラブチームを主催大会に出場させないことを決めた。国際バスケットボール連盟も9月に開催される女子W杯に出場権を得ていたロシアを除外した。このような除外への反発も出ている。ロシアのパラ選手は「今、私たちは大きなスポーツイベントにいる。スポーツと政治は別物だ」と述べた。また、ロシアサッカー連合は国際サッカー連盟と欧州連盟の措置をスポーツ仲裁裁判所に提訴すると発表した。

今回の問題は、国家の責任を、選手個人にどこまで負わせるのか、参加させた場合に、他の選手たちの反感をどう考慮するのかが問われるところにある。IPC会長も記者からのインタビューで「ここに来たアスリートたちは侵略国家で生まれたが、兵士でも侵略者でもない。そこはきちんと区別しなくてはいけない」と訴えていた。また、国際体操連盟の渡辺守成会長は「選手に希望を失わせることは新たな憎悪を生み、スポーツが分断を深めることになる。悩ましい、難しい判断だ」と語る。

戦争、コロナ、地球温暖化、人権問題、ジェンダー等がスポーツに大きく影響する時代である。スポーツだけに専念し、政治、社会などの問題には無関心でいることは許されない。バスケットボールと同じように、大会開催、運営などにおいても適切な状況判断が問われる。